[head](file:///E:\岩倉紙芝居\koten\koten.htm)（岩倉紙芝居館古典館<http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm>）　宰主　上田啓之

『荀子』議兵篇に、臨武君の言として「孫（子）・呉（子）も之（勢利、変詐、感忽、悠闇）を用いて、天下に敵無し」とあり、『韓非子』五蠧篇には、「孫・呉の書を蔵する者は、家ごとに之れ有り」、さりとて兵は弱いと嘆いており、戦国時代に広く普及していたとされる。司馬遷は「孫子・呉起列伝」を著し、呉王の闔閭（こうりょ、在位BC514-496）に仕えた斉人の孫武、その百年後の子孫、斉の田忌に仕えた孫臏の事績（桂陵の戦BC353、馬陵の戦BC341）、孔子の高弟の曾子の弟子であり、後に魏の文候（在位BC445-396）、武候（在位BC395-370）に仕えた衛人の呉岐の事績を記した。『漢書』芸文志・兵権謀家類には、『呉孫子兵法』82巻・図9巻、『漢書』30巻・志第10に「斉の孫子89編、図4巻」とあり、 顔師古がこれに「孫殯」と注 している。現テキストは13編であり、魏の曹操（武王）が編纂注した『魏武注孫子』による。  
1972年、山東省銀雀山の前漢時代の墳墓から『竹簡孫子』や『孫殯兵法』の竹簡が出土し、『呉孫子兵法82巻・図9巻』と『斉の孫子（孫殯）89編、図4巻』は別物で、孫殯の兵法書は伝わっておらず、『呉孫子兵法』が継承されていることが判明したそうである。孫武の記したものが、後継者により82巻・図9巻に膨れあがり、曹操が基本となる部分に簡略化したとされる。続日本記、天平宝字四年（760年）十一月丙申条に、「舍人の春日部三関に刀を授け、中衛舍人土師宿禰関成等六人を大宰府に遣はし、大弐吉備朝臣真備に就かせ、諸葛亮八陳と孫子九地及び結営向背を習はしむ」とあり、「孫子」はこの時代から我が国でも読まれていた。  
  
 　  
  
、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、孫子曰く、およそ用兵の法、馳車千駟（ちしゃせんし）、革車千乗（かくしゃせんじょう）、帯甲（たいこう）十万、千里に糧（りょう）を饋（おく）る、すなわち内外の費（ついえ）、賓客（ひんかく）の用、膠漆（こうしつ）の材、車甲（しゃこう）の奉（ほう）、日に千金を費（つい）やし、しかる後十万の師挙（あが）る。それ戦（たたかい）に用い、勝つこと久しければ、すなわち兵を鈍（にぶ）らせ鋭（えい）を挫（くじ）く。城を攻めれば、すなわち力屈（つ）き、久しく師を暴（さら）せば、すなわち国用（こくよう）足たらず。それ兵を鈍（にぶ）らせ鋭を挫（くじ）き、力を屈（つ）くし貨を殫（つ）くせば、すなわち諸侯、その弊（へい）に乗じて起こる。智者ありといえども、そのあとを善（よく）することあたわず。故に兵は拙にして速を聞くも、いまだ巧（こう）にして久を睹（み）ず。それ兵久しくして国の利、いまだこれあらず。故にことごとく用兵（ようへい）の害を知らずして、すなわちことごとく用兵の利（り）を知ることあたわず。  
■馳車千駟　戦闘用の戦車、戦士三人（士大夫）、馬四頭の馬車千台。中原は平野であり、戦車での戦いが主力となる。■革車千乗　輜重（しちょう）車千台　■帯甲　鎧を着けた兵士、武装した兵士　兵役で徴発された農民　■糧　十万人の食料や数千頭の馬や牛の飼料　■内外の費　国内、国外で費やす経費　■賓客の用　外交用の贈答品　■膠（にかわ）漆（うるし）、車輌や武具補修用材　■奉　車甲を維持供給する経費　■十万の師に一日千金、何日で決着をつけるかが問題。師が増加し、日数が増加する場合の軍費の脅威。■勝久「太平御覧」の引用では勝を省き、単に「久しくして」とする。勝（shèng）では勝つこと、勝つこと久しくしてとなる。勝（shēng）では堪えること。久しく勝（た）うれば。■兵は農閑期であればまだしも、農繁期にさしかかると帰郷することを求める。兵の鋭気が挫かれることを恐れる。■屈は、説文に、「尾無し」とあり、禽獣が尾を垂れる状態、屈力は、鋭気が鈍、力が衰えた状態。■暴は獣屍が日や雨に曝（さら）されることが原義、師が長期に亘り野営で日や雨に曝される。■殫は、説文に、「殛盡」、極端に尽きること。戦費が極端に財政を圧迫する状態。■千乗（shèng）の国とは大諸侯の国　論語、学而篇に、「子の曰はく、千乗の国を道（みちび）くに、事に敬（つつ）しみて信（まこと）あり、用を節して人を愛し、民を使ふに時を以てす」とある。道はdǎoで導くこと。君臣、君民の間の信を第一とするは、孔子も孫子も同じ。節用とは節度をもって徴税し支出すること。人を大事にする。賦役は農繁期を避ける。それが屈力殫貨となれば、他の諸侯がそこにつけこむ。■拙速　拙（まず）く速（すみ）やか（に終える）。功之久　功（うま）くして久（なが）びく　睹は目にすること。未睹、孫子がいままで目にしたことがない。戦争が長引けば必ず国を疲弊させる。孫子は、「用兵は鋭気を失うことなく、短期に決着をつける」ことを旨とする。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、　善（よ）く兵を用（もち）うる者は、役（えき）は再びは籍（せき）せず、糧（りょう）は三（み）たびは載（さい）せず。用（よう）を国に取り、糧（りょう）を敵による。ゆえに軍食（ぐんしょく）足るべきなり。国の師に貧（ひん）なるは、遠く輸（いた）せばなり。遠く輸（いた）さば百姓貧（まず）し。師に近き者は貴売（きばい）すればなり。貴売（きばい）すればすなわち百姓（ひゃくせい）は財竭（つ）く。財竭（つ）くればすなわち丘役（きゅうえき）に急にして、力屈（くっ）し財殫（つ）き、中原（ちゅうげん）のうち、家に虚（むな）しく、百姓の費、十にその七を去る。公家（こうか）の費、破車（はしゃ）罷馬（ひば）、甲冑（かっちゅう）矢弩（しど）、戟楯（げきじゅん）蔽櫓（へいろ）、丘牛（きゅうぎゅう）大車（だいしゃ）、十にその六を去る。ゆえに智将（ちしょう）は務めて敵に食（は）む。敵の一鍾（しょう）を食むは、わが二十鍾（しょう）に当たり、𦮼秆（きかん）一石（せき）は、わが二十石（せき）に当あたる。  
■役は軍役。■籍は戸籍、伍籍（兵籍）をいう。再籍は再び徴兵すること。■三載、出陣と帰陣の際の食糧は自国で用意するが、その他は敵国で調達する。■用は兵士、武器、戦具。■糧はそれを運ぶ人足、牛馬、車輌を要する。■十万の軍を千里の外に遠征させるに、七十万家の力を要するという。■国が師（軍派遣）により貧しくなるのは大量の物資を遠くまで運輸することによる。高値で買い取るので物資は欠乏し、物価は高騰する。百姓の財が尽きる。■丘役とは井田16の単位を丘とし兵役に際して、戎馬一匹、牛三頭を供出すること。4丘を甸とし、甸に戎馬四匹、牛十六頭。丘車一乘，甲士三人，歩卒七十二人有りとされ、魯の成公の時、丘に甸の負担を求めた。この支出が7/10となり生活が破綻する。■破車罷馬　壊れた車消耗した馬　■戟楯蔽櫓　攻撃用の矛と盾及び防御用の大盾　■丘牛大車　運搬用の牛と荷車　■鍾は六斛四斗、食用。■𦮼は豆稭（豆殻）。秆は禾藁（稲藁）。これは牛馬の飼料。  
  
、、、、、、、、ゆえに敵を殺すは怒（いかり）なり。敵の利（り）を取るは貨（か）なり。ゆえに車戦（しゃせん）に車十乗已上（いじょう）を得（う）れば、そのまず得たる者を賞（しょう）し、しかしてその旌旗（せいき）を更（あらた）め、車は雑（まじ）えてこれに乗らしめ、卒（そつ）は善くしてこれを養わしむ。これを敵に勝ちて強（きょう）を益（ま）すと謂う。  
■平常心で人を殺すことはできかね、敵に怒りを持たしむ。■曹操は、「軍に財無くば、士は來らず。軍に賞無くば、士は往かず」とする。孫子の脈絡は、鍾と石を敵から調達するごとく、賞となる財貨も敵から調達する。■車戦が中心の戦争。敵の戦車、十以上を得る。最初に得た者を賞す。得た車の旌旗を自軍のものに改めて、自軍の車に混じえて用いる。卒は遇して味方にする。敵の車、卒を加えて自軍を補強する。■賞其先得者は以下の註に論じられるが、賞すこと、賜うものについては分かりづらい。賞とは、昇進、捕獲した卒を賜うようである。陳車之法では、五車を隊とし、僕射一人。十車を官とし、卒長一人。車が十乘に滿てば、將吏二人、とあり、僕射、卒長、將吏を賞として賜う。得た車は、公家はそれを録さず、得た士に分配するようである。  
  
、、、、、ゆえに兵は勝つことを貴ぶ。久しきを貴ばず。ゆえに兵を知るの将（しょう）は、生民（せいみん）の司命（しめい）、国家安危（あんき）の主（しゅ）なり。  
■徴発された兵は勝利すること、戦が早期に終結することを第一とする。将はそのことをよくわきまえ、民を生かすこと、国家を危うくせぬことを主とすべし。

了　2018年1月22日　修正　2020年1月18日

**宋刊十一家註孫子**（[HP](http://www.cos.url.tw/sunzi/10man.htm)）（注釈者のプロフィールについては、古典ぱん（[HP](https://k10p.net/?p=1253)）に詳しい）  
  
〈作戰〉篇  
曹操曰く、戰わんと欲（せ）ば、必ず先ず其の費を算す。務めて糧を敵に因る。  
李筌曰く、先ず計を定む。然る後に戰具を修む。是を以て〈戰〉は〈計〉の篇に次ぐ。  
王晳曰く、計以て勝を知り、然る後に戰を興す。而して軍費を具え、猶以て久しかる可からず。  
張預曰く、計算已に定り、然る後に車馬を完し（すべて備え）、器械を利し（整備し）、糧草を運び、費用を約し、以て戰備を作（なす）、故に〈計〉に次ぐ。  
  
（孫子曰：凡用兵之法，馳車千駟，革車千乘，帶甲十萬。）  
曹操曰く、馳車は輕車なり。駟馬（四頭の馬）に駕す。革車は重車なり。萬騎の重を言う。車に四馬を駕し、三萬の軍を率う。養は二人、主に炊す。家子一人、主に衣裝を保ち固守す。廐二人は、主に馬を養う。凡て五人。歩兵は十人。重は大車を以て牛に駕す。養は二人、主に炊す。家子一人は、主に衣裝を守る。凡て三人なり。帶甲十萬は、士卒の數なり。  
李筌曰く、馳車は戰車なり。革車は輕車なり。帶甲は歩卒。車は一兩、駕すに駟馬を以てす。歩卒七十人。千駟の軍を計さば、帶甲は七萬、馬は四千匹。孫子、以て軍資の數を約すに、十萬を以て率と為し、則ち百萬知る可し。。  
杜牧曰く、輕車は、乃ち戰車なり。古は車戰。革車は輜車、重車なり。器械、財貨、衣裝を載す。『司馬法』に曰く、「一車に甲士は三人、歩卒は七十二人、炊家子は十人、固守衣裝は五人、廐養は五人、樵汲は五人、輕車は七十五人、重車は二十五人」。故に、二乘は一百人を兼ね、一隊を為す。十萬の眾を舉ぐに、革車千乘、其の費用を校（かむが）え支を計せば、則ち百萬の眾皆知る可し。  
梅堯臣曰く、馳車は輕車なり。革車は重車なり。凡そ輕車一乘は、甲士、歩卒二十五人。重車一乘は、甲士、歩卒七十五人。二車各千乘を舉ぐは、是帶甲者十萬人。  
王晳曰く、曹公曰く、「輕車なり。駟馬を駕す。凡て千乘」。晳謂く、馳車は、駕革車を謂う。一乘は四馬を駟と為す。千駟は則ち革車千乘。曹公曰く、「重車なり」。晳謂く、革車は兵車なり。五戎千乘の賦有り、諸侯の大なる者。曹公曰く、「帶甲十萬は、歩卒の數なりと」。晳謂く、井田の法、甸に兵車一乘を出す。甲士三人、歩卒七十二人、千乘は總て七萬五千人。此れ帶甲十萬と言う。豈に當時の權制か？  
何氏曰く、十萬は、成を舉ぐ數なり。  
張預曰く、馳車は、卽ち攻車なり。革車は卽ち守車なり。曹公を按ずに、『新書』に云く、「攻車一乘、前拒一隊、左右角二隊、共に七十五人。守車一乘、炊子十人、守裝五人、廐飬五人、樵汲（打柴汲水）

五人、共に二十五人。攻守二乘、凡て一百人」。師十萬を興せば、則ち車二千を用い、輕重各半す、此と同じ。  
  
（千里饋糧，）  
曹操曰く、境を越ること千里。  
李筌曰く、道理は縣（懸）遠（隔たること遠し）。  
  
（則内外之費，賓客之用，膠漆之材，車甲之奉，日費千金，然後十萬之師舉矣。）  
曹操曰く、購賞（懸賞；獎賞）猶外（ほか）に在るを謂う（この他に報償金がある）。  
李筌曰く、夫れ軍外に出ずは、則ち帑藏（国庫）内に竭（つ）きる。千金を舉ぐとは、多費を言う。千里の外に贏糧（攜帶著糧食）すは、則ち二十人が一人に奉る（一人の糧食に二十人を要す）。  
杜牧曰く、軍には諸侯交聘の禮有り。故に、「賓客」を曰う。車甲器械は、完緝（全て取りそろえ）修繕す。膠漆と言うは、其の微細を舉ぐ。千金とは、費用の多きを言う。猶贈賞は外に在り。  
賈林曰く、計費不足せば、未だ以て師を興し眾を動（うごか）す可からず。故に李太尉曰く、「三軍の門、必ず賓客が論議有り」。  
梅堯臣曰く、師十萬を舉げ、糧を饋（おく）ること千里、日費此の如し。師久（長期）の戒なり。  
王晳曰く、内は國中を謂う。外は軍所を謂う。賓客とは、諸侯の使、軍中に及び吏士を宴饗するが若し。膠漆、車甲は細を舉げ（膠漆は細）大を與す（車甲は大）。  
何氏曰く、老師（長期戦で疲弊する軍）は財を費す。智者はこれを慮る。  
張預曰く、國を去ること千里。卽ち當に糧に因る。若し供餉須（食料を送る）べきは、則ち内外騷動し、路に疲困し、蠹耗（损耗）極まりない。賓客は、使命と遊士なり。膠漆は、器械が物を修飾す。車甲は、金革が類を膏轄す（油を注しくさびを施す）。其の所費を約せば、日に千金を用う。然る後に能く十萬の師を興す。千金は重費を言う。購賞猶外に在り。  
  
（其用戰也勝，久則鈍兵挫銳，攻城則力屈。）  
曹操曰く、鈍は弊なり。屈は盡なり。  
杜牧曰く、勝久は淹久（長久）にして後に勝つこと能うを謂う。敵と相持して久しくして後に勝つを言う。則ち甲兵鈍弊し、銳氣挫衂（じく、くじける）し、攻城し則ち人力殫盡（たんじん）す（極端に尽きる）。屈は折なり。  
賈林曰く、戰は人に勝つと雖も、久しくして利無し。兵は全勝を貴しとすも、兵鈍り銳を挫し、士は傷し馬は疲して屈す。  
梅堯臣曰く、勝つと雖も且久し。則ち必ず兵仗鈍弊して軍氣銳を挫す。城を攻むこと久しくして、則ち力必ず殫（つ）き屈す。  
王晳曰く、屈は窮なり。勝を求むこと以て久しく、則ち鈍弊折挫し、攻城して則ち益甚（いかにぞ）や（益無し）。  
張預曰く、兵を交え合戰に及ぶ。久しくして後に勝つこと能う、則ち兵は氣を疲し沮（くじけ）る。千里攻城せば、力必ず困屈す。  
  
（久暴師則國用不足。）  
孟氏曰く、久しく師を暴（さら）らす、眾を千里の外に露（あめざら）す、則ち軍と國と費用相ひ供すに不足す。  
梅堯臣曰く、師久しく外に暴せば、則ち輸用給せず（必要な物資を輸送供給できない）。  
張預曰く、日に千金を費し、師を久しく暴らす。則ち國用豈に能く給すや？漢の武帝、征すこと窮し、深く討ち、久しく（軍を）解かず、其の國用空虛に及び、乃ち哀痛の詔を下すが若き、是なり。  
  
（夫鈍兵挫銳，屈力殫貨，則諸侯乘其弊而起，雖有智者，不能善其後矣。）  
李筌曰く、十萬の眾を舉げ、日に千金を費し、唯に外に頓挫すに非ず、亦、財内に殫（つ）く。是を以て聖人師を暴すこと無し。隋大業初に、煬帝、兵を重じ征を好む。力、鴈門の下に屈し、兵、遼水の上に挫す。河（黄河）を疏（とお）すこと淮（淮水）に引き（運河の建設）、轉輸（運輸）すること彌（いよいよ）廣く、師を萬里に出し、國用不足す。是に楊玄感、李密、其の弊に乘じて起（た）つ。縱（たと）え蘇威（そい、煬帝の重臣）、高熲（こうけい、隋文帝の宰相）といえど、豈に能くこれに謀（はかりごと）為せようや？（叛乱阻止は出来ない）。  
杜牧曰く、蓋し師久しく勝たずを以て、財力俱に困し、諸侯、これに乘じて起つ。智能が士有りと雖も、亦、此の後に善く謀畫を為すこと能はず。  
賈林曰く、人離れ財竭（つ）く。伊（伊尹）、呂（呂尚）復た生れると雖も、亦、此の亡敗を救うこと能わず。  
杜佑曰く、當時用兵の術有ると雖も、其の後患を防ぐこと能わず。  
梅堯臣曰：勝を取り城を攻め、師を暴すこと且（また）久しければ、則ち諸侯、此の弊に乘じて起ち我を襲う。我に智將有りと雖も、制すこと能わず。  
王晳曰く、其の弊甚しきを以て、必ず危亡の憂有り。  
何氏曰く、其の後、兵不勝たずして敵其の危殆に乘じて、智者と雖も其の善計を盡して保全すること能わざることを謂う。  
張預曰：兵已に疲る。力已に困す。財已に匱（とぼ）し。隣國、其の罷弊に因り、兵を起し以てこれを襲う。則ち縱え智能の人有りとも、亦、其の後患を防ぐこと能わず。吳が楚を伐ち郢に入り、久しくして歸らず、越兵遂に吳に入るが若し。當に是の時に、伍員、孫武が徒有りと雖も、何んぞ嘗て能く後に善謀為せようか？（出来なかった）。  
  
（故兵聞拙速，未睹巧之久也。）  
曹操、李筌曰く、拙と雖も、速を以て勝つこと有り。未だ睹（み）ざるは、其の無きを言ふ。。  
杜牧曰く、攻取の間、機智に拙と雖も、然れども神速を以て上と為す。蓋し師を老（疲労）し、財を費し、兵を鈍す患無くば、則ち巧と為す。  
孟氏曰く、拙と雖も、速を以て勝つこと有り。  
陳皥曰く、所謂疾雷は耳を掩（おお）うに及ばず、卒電は目を瞬（まばた）くに及ばず。  
杜佑が註は孟氏に同じ。  
梅堯臣曰く、拙は速を以て勝つを尚す、未だ工（巧）にして久くして可なるを見ず。  
王晳曰く、晳謂うは、久しければ則ち師老し財費し、國は虛、人は困す。巧なるは、斯の患無きを保つ。  
何氏曰く、速は拙と雖も、財力を費さず。久は巧と雖も、恐るらくは後患生ず。後秦の姚萇（ようちょう）と符登（ふと）相持す。萇が將、苟曜（こうよう）は逆萬堡に據り、密に符登を引く（手引きす）。萇は登と戰い、馬頭原に敗れ、眾を收（おさ）め復た戰う。姚碩德（ちょうせきとく）が諸將に謂いて曰く、「上（かみ）、輕戰に愼み、毎（ことごと）に計を以てこれを取らむと欲（す）。今、戰は旣に利を失す。更に賊に逼（せま）るは、必ず由有り」。萇聞きて碩德に謂いて曰く、「登が用兵は遲く緩し。虛實を識らず。今、輕兵にして直進し、徑（最短）にして吾が東に據る。必ず苟曜とこれ連結す。事久しければ變じて成る（苟曜と符登との連結が成立する）、其の禍は測り難し。速戰す所以は、苟曜が竪子（小子、蔑称）これを謀らしむも未だ就（な）らず。これと好（よみ）すこと未だ深からざるのみ」。果して大きにこれを敗る。武后の初に、徐敬業（唐朝将領）江都に兵を舉げ、皇家を匡復す（匡復府大将軍）と稱す。盩厔の尉（校尉）、魏思恭を以て謀主と為（す）。計を思恭に問う。對えて曰く、「明公、旣に太后少主を幽縶（幽閉）すを以て、志は匡復に在り。兵は拙速を貴とす、宜しく早く淮北を渡るべし。親ら大眾を率いて、直に東都に入るべし。山東が將士、公に勤王の舉有るを知れば、必ず死を以て從わん。此れ則ち日の刻期を指し（期限を定め決行せば）、天下必ず定らん」。敬業、其の策に從わんと欲（す）。薛璋（せつしょう、薛仲章）又說きて曰く、「金陵の地に、王氣已に見（あらわ）る。宜しく早くこれに應ずべし。兼ねて大江に險を設くこと有れば、以て自らを固む可きに足る。請う、且た常、潤等の州を攻め取りて、王霸の業を以て為し、然る後に兵を率いて北上し、鼓して行きて前（すす）む。此れ則ち退きて歸る所有り、進みて不利無し。實（まこと）に良策なり」。敬業、以て然りと為（す）。乃ち自ら兵四千人を率いて。南に渡り以て潤州を擊つ。思恭密に杜求仁に謂いて曰く、「兵勢は宜しく合すべき、分く可らず。今、敬業、力を幷（あわ）せ淮を渡り、山東が眾を率いて以て洛陽に合すを知らず。必ず能く事を成すこと無し」。果して敗れる。  
張預曰く、但に能く勝を取るに、則ち寧（むし）ろ拙速。而るに巧久無し。司馬宣王、上庸を伐つが若し。一月を以て一年を圖る（一年の事を一月で行う）。死傷を計らずして、糧と競うは（糧秣を運搬させる）、斯れ拙速を欲すと謂う可し。  
  
（夫兵久而國利者，未之有也。）  
李筌曰く、『春秋』に曰く、「兵は猶火のごとし。戢（おさ）めずんば、將に自ら焚（や）く」。  
賈林曰く、兵久しく功無くば、諸侯に（異）心生ず。  
杜佑曰く、兵は兇器、久しくして則ち變生ず。智伯（春秋末期の晋の政治家）趙を圍むが若し。年を逾して歸さず。卒（にわか）に襄子に擒（とら）わる所と為り、身は死に國分かる。故に、『新序』傳に曰く、「戰を好み武に窮し、未だ亡びざる者有らず」。  
梅堯臣曰く、力屈（くっ）し貨殫（つ）き、何ぞ利、これ有りや？  
張預曰く、師老（疲労）し財竭（つ）き、國に何ぞ利や？  
  
（故不盡知用兵之害者，則不能盡知用兵之利也。）  
李筌曰く、利害は相依りて生ず所、先ず其の害を知り、然る後に其の利を知る。  
杜牧曰く、害これは、人を勞し財を費す。利これは、敵を吞み境を拓く。苟も己が患を顧みざれば、則ち舟中の人敵國の為に盡し、安んぞ能く敵人より利を取るかな？  
賈林曰く、將驕り卒惰（おこた）り、利を貪り變を忘る。此の害最も甚し。  
杜佑曰く、言うは、國を謀り軍を動かし、師を行うに、先ず危亡の禍を慮からずんば、則ち利を取るに足らず。秦伯が鄭を襲ふ利を見て、不崤函の敗を顧みざるが若し。吳王は齊を伐つ功を矜（ほこ）りて姑蘇の禍を忘る。  
梅堯臣曰く、再籍せず、三載せずは利なり。百姓虛しく、公家費すは害なり。苟も害を知らずんば、又安ぞ利を知らむ？  
王晳曰く、久しくして能く勝つは、未だ害を免れざる。速は則ち利斯れ盡す。  
張預曰く、先ず老師殫貨の害を知り、然る後に能く敵を擒とし勝を制す利を知る。  
  
（善用兵者，役不再籍，糧不三載。）  
曹操曰く、籍は猶賦のごとし。言ふは、初め民を賦して便ち勝を取る。歸國して兵を發すこと復たせず。始め糧を載すも、後には遂に食を敵に因る。兵還りて國に入るに、糧を以てこれを迎うこと復たせず。  
李筌曰く、籍は書なり。籍書を再びせず。人勞して怨生ずを恐る。秦は關中の卒を發し、是以て陳、吳が難（陳勝・呉広の乱）有り。軍出でば、遠近を度（はか）りてこれを饋（おく）る。軍入れば、糧を載してこれを迎う、これを三載と謂う。境を越えれば、則ち敵に榖を館す（穀を貯蔵する館がある）。三載無きの義なり。  
杜牧曰く、敵を審（つまひらか）にせば攻む可し、我を審にせば戰う可し。然る後に兵を起せば、便ち能く敵に勝ちて還る。鄭司農が『周禮』に註して曰く、「役は兵を發し役を起すを謂う。籍は乃ち伍籍なり」。參に比（したが）いて伍と為す。内政に因りて軍令に寄す。伍籍を以て軍を發し役を起す。（五家をして伍とす，伍に長有り。十長を一里とし、里に假士有り。四里を一連とし、連に假五百有り。十連を一邑とし、邑に假侯有り。皆て其の邑の賢材を擇び護有り。地形を習い、民心を和す者。居れば則ち民に射法を習わせ、出れば則ち民に應敵を教える。故に伍を卒い内に成す。則ち軍正を外に定む）。  
陳皥曰く、籍は借なり。再び借民して役せず。糧は、往きて則ち載す、歸りて則ちこれを迎える。是三載せず。困せざるの兵、竭きざるの國。速せば利なるを言う。  
梅堯臣、陳皥が註に同じ。  
王晳、曹操が註に同じ。  
張預曰く、役は兵を興し眾を動す役を謂う。故に「師卦」の註に曰く、「任は大、役は重し、功無くば則ち兇」。籍は、調兵の符籍を謂う。故に、漢制に尺籍伍符有り。言うは、一舉にして則ち勝つ、國に兵役を再籍すべからず。糧は始め出して則ちこれを載す。境を越えれば則ちこれを掠し、歸國すれば則ちこれを迓（が）す（迎える）。是三載せずなり。此れ兵を久しく暴すべからずを言う。  
  
（取用於國，因糧於敵，故軍食可足也。）  
曹操曰く、兵甲戰具は、用を國中に取り、糧食は敵に因る。  
李筌曰く、我が戎器を具え、敵の食に因れば、師を千里に出すと雖も、匱乏すること無し。  
杜佑曰く、兵甲戰具は用を國中に取り、糧食は敵に因る。資用を我國に取り、糧食を敵家に因る。晉の師は楚に穀を館す、是なり。  
梅堯臣曰く、軍の須用（必要）は國に取り、軍の糧餉（糧食）は敵に因る。  
何氏曰く、因とは、兵境を出ずを謂う。聚（落）を鈔（かす）め野（田畑）を掠（かす）め、敵に克つに至り、城を拔きて其の儲積（蓄積、備蓄）を得る。  
張預曰く、器用を國に取るは、以て物輕くして致し易し。糧食敵に因るは、以て粟重くして運び難し。夫れ千里に糧を饋るは、則ち士に飢色有り。故に、（敵の）糧に因れば則ち食足るべし。  
  
（國之貧於師者遠輸，遠輸則百姓貧。）  
李筌曰く、兵役數（しばしば）起れば、而して賦歛は重し。  
杜牧曰く、『管子』に曰く、「粟三百里を行けば、則ち國に一年の積無し。粟四百里を行けば、則ち國に二年の積無し。粟五百里を行けば、則ち眾に饑色有り」。此れ粟重く、物輕きを言う。推移す可からず。これを推移せば、則ち農夫耕牛俱に南畝（杜甫の詩を引用、南京久客耕何畝）を失う。故に百姓得て貧しからざることなし（貧窮せざるをえず）。  
賈林曰く、遠輸せば則ち財は道路に耗し、轉運に弊し、百姓日に貧し。  
孟氏曰く、兵車を千里の外に轉運せば、財は則ち道路に費され、人には困窮者有り。  
張預曰く、七十萬家の力を以て、十萬の師を千里の外に供餉（供給）す、則ち百姓得て貧しからざることなし。  
  
（近於師者貴賣，貴賣則百姓財竭。）  
曹操曰く、軍行已に界を出でば、師に近き者財を貪り、皆貴く（高値で）賣る。則ち百姓虛竭す（物価が高騰し欠乏す）。  
李筌曰く、夫れ軍に近きは必ず貨易有り（軍は物資を買い上げる）。百姓、財に徇い產を殫（つく）してこれに從い、竭（つ）きる（意に反して買い尽くされ欠乏する）。  
賈林曰く、師徒聚る所、物皆暴貴す。人、非常の利を貪り、財物竭して以てこれを賣る。初め利を獲て殊多しと雖も、終には當に力疲れ貨竭きるべし。又、云く、旣に非常の歛有り（非常の税で物不足）、故に賣る者は價を求むこと無厭（際限なく値が上がる）。百姓、力を竭してこれを買えば、自然ら家國は虛盡（欠乏）す。  
杜佑曰く、言うは、軍師近ければ、市に非常の賣多し。當に時に貴を貪り以て末利（商売）に趨（はし）る、然る後に財貨殫して盡き、家國は虛（空）なり。  
梅堯臣曰く、遠き者は供役すに以て轉饋（転送）し、近き者は利を貪りて貴賣す。皆國を貧しく民を匱しく（欠乏）する道なり。  
王晳曰く、夫れ遠輸せば則ち人勞費す。近市せば則ち物騰貴す。是の故に、久師せば則ち國患と為る。曹公曰く、「軍行已出界，近於師者貪財，皆貴賣。」晳謂えらく、將に界を出ず。  
張預曰く、近師の民、必ず利を貪りて、遠來輸餉（食糧を運ぶ）の人による其の物に貴貨す。則ち財竭きざるを得ず。  
  
（財竭則急於丘役。）  
張預曰く、財力殫くし竭き、則ち丘井の役、急迫而して供すこと易からず。或に曰く、丘役は魯の成公が丘甲を作るが如きを謂う。國用急迫せば、乃ち使丘をして甸賦を出だす、常に違う制なり。丘は十六井、甸は六十四井。（四井を邑と為し、四邑を丘と為す。丘は十六井なり。戎馬一匹、牛三頭有り。四丘を甸と為す。甸は六十四井なり。戎馬四匹、兵車一乘、牛十二頭、甲士三人、卒七十二人、干戈備具有り。是乘馬之法を謂う）とあり、この負担ができなくなること。また、丘に甸の負担を求めることともいう。  
  
（力屈、財殫，中原内虛於家。百姓之費，十去其七。）  
曹操曰く、丘は十六井なり。百姓財殫くし盡く。而して兵解かずば、則ち糧を運ぶに力原野に盡きる（軍に届かない）。十其の七を去るとは、破費（破産）する所なり。  
李筌曰く、兵久しくして止まず。男女怨みて曠（むな）し。輸輓（物資運送）と丘役に困し、力屈っし財殫きて、百姓の費（ついえ）、十に其の七去る。  
杜牧曰く、『司馬法』に曰く、「六尺を歩と為し、歩百を畝と為し、畝百を夫と為し、夫三を屋と為し、屋三を井と為し、四井を邑と為し、四邑を丘と為し、四丘を甸と為す」。丘は蓋そ十六井なり。丘に戎馬一匹、牛四頭有り。甸に戎馬四匹、牛十六頭。丘車一乘，甲士三人，歩卒七十二人有り」。今兵を解かずと言うは、則ち丘役益（ますます）急（せま）り、百姓の糧盡き財竭き、力は原野に盡き、家業の十其の七を耗すなり。  
陳皥曰く、丘は聚なり。賦役を聚歛し以て軍須に應ずこと此の如くば、則ち財人に竭き、人困せぬこと無し。  
王晳曰く、急は、常賦に暴すなり。魯の成公丘甲を作るが若き是なり。此の如くせば、則ち民費は太半す。公費は差減さる。故に十七と云う。曹公曰く、「丘，十六井。兵不解，則運糧盡力於原野。」  
何氏曰く、國は民を以て本と為す。民は食を以て天と為す。人の上に居る者宜しく重惜すべし。  
張預曰く、糧を運びて則ち力屈し、輸餉して則ち財殫く。原野の民、家產内に虛し、其の所費を度（はか）れば、十に其の七無し。  
  
（公家之費，破車罷馬，甲胄矢弩，戟楯蔽櫓，丘牛大車，十去其六。）  
一本作「十去其七」。  
曹操曰く、丘牛は丘邑の牛を謂う。大車は乃ち長轂車（戦車は幅が狭く、運搬車は幅が広い）なり。  
李筌曰く、丘は大なり。此の數器は、皆軍が須（要）す所。言うは、遠近の費、公家の物、十に七を損う。  
梅堯臣曰：百姓は財糧力役を軍の費に奉つるを以て、其の資十に七を損う。公家は牛馬器仗を軍の費に奉つるを以て、其の資十に六を損す。是賦竭き兵窮し、百姓弊すを以てす。役は急にして民貧しく、國家虛し。  
王晳曰く、楯は干なり。蔽は屏蔽を以てす可し。櫓は大楯なり。丘牛は、古の所謂匹馬丘牛なり。大車は牛車なり。『易』に曰く、「大車以て載す」。  
張預曰：兵は車馬を以て本と為す。故に先に車馬を言う。疲は敝なり。蔽櫓は楯なり。今これを彭排と謂う。丘牛は大牛なり。大車は必ず革車なり。始めに言う破車疲馬は、攻戰の馳車を謂う。次に言う丘牛大車は、卽ち輜重の革車なり。公家の車馬器械、亦、十に其の六を損う。  
  
（故智將務食於敵，食敵一鍾，當吾二十鍾，𦮼秆一石，當吾二十石。）  
曹操曰く、六斛四斗を鍾と為す。𦮼は豆稭（豆殻）なり。秆は禾藁（稲藁）なり。石は一百二十斤なり。轉輸の法では、二十石を費して一石を得る。一に云く、𦮼は音忌、豆なり。七十斤を一石と得す。吾が二十に當る。遠費を言う。  
杜牧曰く、六石四斗を一鍾と言す。一石は一百二十斤。𦮼は豆稭なり。秆は禾藁なり。或に言く、𦮼は秆藁なり。秦、匈奴を攻む。天下に糧を運ばしむに、黄腄、瑯琊負海の郡（沿海諸郡）に起り、北河に轉輸す。三十鍾を率て一石致る。漢の武（帝）の建元中に、西南夷に通じ、作者數萬人、千里に饋糧を負擔し、十餘鍾を率て一石致る。今『孫子』の言「敵の一鍾を食うは、吾が二十鍾に當る」を校（かむが）うに、蓋し平地千里轉輸の法、二十石を費し一石を得るを約すに、道里を約さず。蓋し漏闕（欠）なり。黄腄、音は直瑞の反、又音誰、東萊に在り。北河は卽ち今の朔方郡。  
李筌曰く、遠師に一鍾の粟を轉ずに、二十鍾を費して方に軍に達す可し。將が智なり、務めて敵に食し以て己が費をく。  
孟氏曰く、十斛を鍾と為す。千里轉運を計るに、道路での耗費、二十鍾で一鍾を軍中に致る可し。  
梅堯臣が註は曹操と同じ。  
王晳曰く、曹公曰く、「𦮼，豆稭也。秆，藁也。石者，百二十斤也。轉輸之法，費二十乃得一」。晳謂へらく、上文「千里に糧を饋（おく）る」、則ち轉輸が法は千里を謂うのみ。𦮼は今「萁」に作る。秆は、故書に「芉」と為すが當に「秆」に作るべし。  
張預曰く、六石四斗を鍾と為す。一百二十斤を石と為す。𦮼は豆稭なり。秆は禾藁なり。千里に糧を饋る、則ち二十鍾を費し、石は而して一鍾を得る。石軍所に到る。若し險阻を越えるに、則ち猶不啻（それにとどまらない、もっと減る）。故に秦が匈奴を征すに、三十鍾を率いて而して一石を致す。此の言、能く將必ず糧を敵に因る。  
  
（故殺敵者，怒也。）  
曹操曰く、威怒以て敵い致す。  
李筌曰く、怒は軍威なり。  
杜牧曰く、萬人能く同心して皆怒（ど）すこと非ず。我に在りては、これを激し勢以て然らしむ。田單が卽墨を守り、燕人をして降る者を劓（はなそぎ）せしめ、城中人の墳墓を掘らしむ類是なり（燕人に偽情報を流し非道を実行させ、城中人を恐怖と怒りで団結せしめた）。  
賈林曰く、人が怒無くして、則ち殺すこと肯（がえん）ぜず（殺す気になれない）。  
王晳曰く、兵は威怒を主とす。  
何氏曰く、燕が齊の卽墨を圍み、齊の降者盡（ことごと）く劓ぐ。齊人皆怒り、愈（いよいよ）堅く守る。田單は又反間に縱ちて曰く（間者を放って流言す）、「吾は燕人が吾が城外の塚墓を掘り、先人を戮辱（りくじょく）すを懼る、寒心す可し（ぞっとする）」。燕軍は盡く壠墓（ろうぼ、小高い丘の墓）を掘り、死人を燒く。卽墨の人は城上より望見し、皆泣涕（きゅうてい）し、其れ出でて戰わんとし、怒自ずから十倍。單は士卒用う可きと知り、遂に燕師を破る。後漢の班超が西域に使わされ、鄯善に到り、其の吏士三十六人に會い、與して共に飲む。酒酣（さけたけなわ）にして、激し怒すに因りて曰く、「今俱に絶域に在り、大功を立て以て富貴を求めんとす。（匈奴の）虜使到りて裁くこと數日にして王の禮貌卽ち廢さる。如し吾が屬を收め（収監し）匈奴に送らば、骸骨長じて犲狼が食と為らん」。官屬皆曰く、「今、危亡の地に在り、死生は司馬（班超）に從わん」。超曰く、「虎穴に入らずば、虎子を得ず。當に今、この計、獨り夜に有りて火を以て虜を攻む、彼をして我が多少を知らしめず。必ず大きに震怖せしめ、盡を殄（た）つ可し。此の虜を滅し、則ち功成なり事立つ」。眾曰く、「善し」。初夜に、將吏士、虜營に奔る。天に大風會（あつま）る。超は令十人に鼓を持たしめ、虜舍に藏した後に、約して曰く、「火燃ゆを見れば、皆當に鼓を大きに鳴らさむか」。餘人は悉く弓弩を持ち、夾門に伏す。超は風に順いて火を縱（はな）つ。虜眾は驚亂し、眾は悉く燒け死ぬ。蜀の龐統、劉備に益州の牧の劉璋を襲うことを勸める。備が曰く、「此の大事、倉卒（軽率に）す可からず」と。璋が備をして張魯を擊たせしむに及び、乃ち璋に從いて萬兵を求め資寳に及び、以て東行せむと欲（す）。璋は但に兵四千を許し、其の餘は皆て給すこと半ば。備は因りて激怒して其の眾に曰く、「吾は益州の為に強敵を征し、師徒は勤瘁（辛苦し疲労が蓄積）し、寧居する遑（いとま）なし。今、帑藏の財（諸々の財貨）を積みて賞功に恡（やぶさか）なる。士大夫に望みて出でて死力で戰うことを為さば、其れ得る可し！」と。是に由りて相與に璋を破る。  
張預曰く、吾が士卒を激し、上下をして同じく怒らしめば、則ち敵を殺すこと可なり。『尉繚子』に曰く、「民の戰う所以は氣なり」と。氣が怒せば則ち人人自ら戰うを謂う。  
  
（取敵之利者，貨也。）  
曹操曰く、軍に財無くば、士は來らず。軍に賞無くば、士は往かず。  
李筌曰く、利は軍の實を益す。  
杜牧曰く、士をして敵の利を見取らしむは貨財なり。謂うは、敵の貨財を得れば、必ず以てこれを賞す。人をして皆欲有らしめば、各自ら為に戰う。後漢の荆州刺史の度尚は、桂州が賊帥の卜陽、潘鴻等を討つ。南海に入り、其の三屯を破り、多く珍寳を獲る。而して鴻等が黨聚（あつま）り猶眾し。（度尚の）士卒驕り富み、鬬志有ること莫し。尚曰く、「卜陽、潘鴻は、賊を作すこと十年。皆攻守に習い、當に須べからく諸郡力を倂せ、これを攻む可し。今軍恣（ほしいまま）に射獵を聽（ゆる）す」。兵士は喜悅し、大小相與に禽に從う。尚乃ち密に人をして潛らせ其の營を焚かしめ、珍積皆盡く（狩猟をさせ密かに彼等の宝物を焼かせた）。獵者は來還し、泣涕せざる莫し。尚曰く、「卜陽等が財貨は數世富ますに足る。諸卿は但に力を倂せざるのみ。亡（うしな）う所少少、何ぞ意に介すに足る！」眾聞きて、咸（みな）憤踴（憤発勇躍）して戰わんと願う。尚は馬に秣（まぐさ）し蓐食（寝床で朝食）せしむ。明晨に徑（まっすぐ）に賊屯に赴く。陽、鴻は備を設けず。吏士は銳に乘じ、遂にこれを破る。此れ乃ち是なり。  
孟氏、杜牧が註と同じ。  
杜佑曰く、人は敵に勝てば厚賞が利有るを知れば、則ち白刃に冒す（むこう見ずに進む）、矢石に當りて而して樂しみて以て進んで戰うは、皆貨財酬勲賞が勞の誘なり。  
梅堯臣曰く、敵を殺すに則ち吾人を怒を以て激し、敵を取るに則ち吾人を貨を以て利す。  
王晳曰く、謂うは、厚賞を設くのみ。眾をして利を貪り自ら取らしむるが若きは、則ち或は節制に違うのみ。  
張預曰く、貨を以て士を啗（たん；利得でつる）し、人をして自ら為に戰わしめ、則ち敵が利を取らしむ可し。故に曰く、「重賞が下に、必ず有夫勇り」。皇朝太祖が將に命じ蜀を伐つに、これに諭して曰く、「得る所の州邑は當に我に與へよ、帑庫(どこ；金蔵)を傾竭（傾け尽く）し、以て士卒に饗せ。國家が欲す所は、惟に土疆（土境；国土）のみ」。是に將吏死戰し、至る所皆下し、遂に蜀を平らぐ。  
  
（故車戰，得車十乘已上，賞其先得者，）  
曹操曰く、車戰を以て、能く敵車十乘已上を得れば、賞してこれを賜う。車戰で車十乘已上を得る者これを賞すと言わず。而るに賞得るは何を言うか？言うは、開示を欲す賞は其の得る所の車が卒なり。陳車の法に、五車を隊と為し、僕射一人。十車を官と為し、卒長一人。車が十乘に滿てば、將吏二人、因りて而してこれを用う。故に别に、これを賜うと言う。將をして恩を下に及ばしめんとす。或に曰く、言うは、自ら車十乘已上を有らしめ、敵と戰い、但に其の有功者を取りこれを賞す。其れ十乘已下は、一乘獨り得ると雖も、餘九乘を皆これを賞す。率進して士を勵す所以なり。  
李筌曰く、賞を重ねば勸進す（[勸めて導](https://www.moedict.tw/%E5%8B%B8%E5%B0%8E)き[鼓して勵](https://www.moedict.tw/%E9%BC%93%E5%8B%B5)す， [某](https://www.moedict.tw/%E6%9F%90)[事](https://www.moedict.tw/%E4%BA%8B)成す[進行](https://www.moedict.tw/%E9%80%B2%E8%A1%8C)を[促](https://www.moedict.tw/%E4%BF%83%E6%88%90)す、昇進せしむ）。  
杜牧曰く、夫れ車十乘已上を得るは、蓋し眾人が命が致す所を用いればなり。若し徧くこれを賞せば、則ち（財）力足らず。其の獲る所が車を與うは、公家は仍りて自ら財貨を以て其の唱謀先登者（唱えて先導した者）を賞せ。此れ士卒を勸勵す所以。故に、上文に云く、「敵が利を取るは、貨なり」。言うは、十乘は、其の綱目（大綱と細目）を舉ぐなり。  
賈林曰く、勸未だ得ざるは、自ら勉めしむなり。  
梅堯臣曰く、徧く賞すは則ち周（あまね）くこと難（かた）し、故に一を獎して百に勸むなり。  
王晳曰く、財を以て其の先に得る所が卒を賞す。  
張預曰く、車一乘は、凡そ七十五人。車を以て敵と戰い、吾が士卒能く敵車十乘已上を獲るは、吾が士卒必ず千餘人を下らず。其の人眾を以てせば、故に、徧く賞すこと能わず。但に厚利を以て其の陳を陷れ先に獲る者を賞し、以て餘眾に勸む。古人が用兵は、必ず使車をして車を奪い、騎をして騎を奪い、歩をして歩を奪わしむ。故に、吳起は秦人と戰い、三軍に令して曰く、「若車が車を得ず、騎が騎を得ず、徒が徒を得ずんば、軍を破ると雖も、皆功無し」。  
  
（而更其旌旗，）  
曹操曰く、吾と同じなり。  
李筌曰く、色を吾と同じう令（せ）しむ。  
賈林曰く、識せざら令む（識別できないようにする）。  
張預曰：敵の色を變え、己と同じう令しむ。  
  
（車雜而乘之，）  
曹操曰く、獨り任ぜず（単独では任用せず）。  
李筌曰く、夫れ降虜の旌旗は必ず其の色を更めて其の事を雜（混じ）えば、車乃ち用う可し。  
杜牧曰く、士卒が自ら敵車を獲て、雜然として任（用）し自らこれに乘るも、官は錄さず。  
梅堯臣曰く、車は雜乘を許すも、旗は故に因ること無し（敵の旗は用いない）。  
王晳曰く、謂うは、敵車を得れば、我車とこれを雜用す可し。  
張預曰く、己が車と敵の車は參雜（混雑）してこれを用う。獨り任ず可からず。  
  
（卒善而養之，）  
張預曰く、獲る所が卒は、必ず恩信を以てこれを撫養す。我が為に用い俾（し）む。  
  
（是謂勝敵而益強。）  
曹操曰く、己が強を益す。  
李筌曰：後漢の光武は銅馬賊を南陽に破り、虜眾は數萬、各（おのおの）を部曲に配す。然るに人心未だ安んぜず。光武は各を本營に歸せ令む。乃ち其の間を輕行（軽装で巡回）し以てこれを勞（いたわ）る。相い謂いて曰く、「蕭王は赤心を推し人を腹中に置く（自分の真心で人に接す）、安んぞ得て死を投ぜざるか（命を投げ出す）！」是に漢は益（ますます）振う（振興す）。則ち其の義(意味)なり。  
杜牧曰く、敵卒を得る。敵が資に因りて、己が強を益す。  
梅堯臣曰く、卒を獲れば則ち其の長ず所に任じ、これを恩を以て養えば、必ず我が用と為る。  
王晳曰く、敵卒を得れば則ちこれを養い、吾が卒と同じうす。善きは、これを侵辱すること勿（な）きを謂う。厚撫して初めて附くが若し、或は（さもなくば）、人心を失う。  
何氏曰く、敵に因り以て敵に勝つならば、何ぞ不強の往かず？（強くならないことはない）  
張預曰く、其の敵に勝ちて其の車と卒を獲て、旣に我が用と為せば、則ち是、己が強を増す。光武は赤心を推し、人人に死を投ぜしむ類なり。  
  
（故兵貴勝，不貴久。）  
曹操曰く、久しきは則ち利せず。兵は猶火のごとし、戢（おさ）めずんば（放置すると）、將に自らを焚（や）かんとす。  
孟氏曰く、速勝し疾還（速帰）を貴とす。  
梅堯臣曰く、上に言う所は皆て速を貴とす。速（すみ）やかなれば則ち財用を省（はぶ）き、民力息（いこ）う。  
何氏曰く、孫子は首尾して兵が久しきの理を言う。蓋し兵は玩ぶ可からず、武は黷（けが）す可からず（軽率にすべからず）の深きを知ることである。  
張預曰く、久しければ則ち師は老し財は竭きる。以て變を生じ易し、故に但に其れ速勝疾歸を貴とす。  
  
（故知兵之將，生民之司命，國家安危之主也。）  
曹操曰く、將賢なれば則ち國安んず。  
李筌曰く、將に殺伐の權有り、威は敵を却（しりぞ）かせむとす。人命の繫る所、國家の安危はここに在り。  
杜牧曰く、民の性命、國の安危、皆て將に由る。  
梅堯臣曰く、此は將を任ず重きを言う。  
王晳曰く、將賢なれば則ち民は其の生を保ち而して國家は安んず。否（さもなくば）、則ち民は毒され殺され而して國家は危（あやう）し。明君に任屬せば、不精す可きや？（明君の下では懸命に行う）  
何氏曰く、民の性命、國の治亂。皆て將を主とす。將の材難（かた）ければ、古今患う所なり。  
張預曰く、民の死生、國の安危。繫（かか）るは將の賢否なり。